

まちやむら、そこに住む人びと (=ざいち) の、
知恵や生き方 (=ち) から学び、実践する活動です。

ざいちのち

No.15 2010.1.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市 中心市街地のそば畑

亀岡フィールドステーション

水運文化の伝承からまちづくりへ —着地型観光という可能性(1)—

大阪商業大学経済学部 原田 禎夫

昨今、「着地型観光^[1]」という新しい旅行形態が注目されている。従来の旅行商品が都市部の旅行会社で企画される「発地型観光」であったのに対し、「着地型観光」とは旅行目的地側が主体的に企画するものをいう。旅行者のニーズの多様化とともに、地元の人しか知らないような穴場や楽しみ方が求められるようになったことが、その背景にあるが、新しい観光資源を開拓し都市部の旅行者を呼び寄せることが地域活性化につながるとして、各地で盛んに着地型観光の充実に向けた取り組みが行われている。

亀岡 FS のある南丹地域でも、着地型観光に向けた取り組みが進められている。しかし、茅葺き民家で有名になった美山町を除けば残念ながら今ひとつ、盛り上がりには欠けているように思える。その原因の一つには地域の持つ魅力をストーリー性をもって来訪者に伝えられていないからではないだろうか。地域固有の文化や景観は、その地域のもつ自然条件や歴史性によって育まれたものであり、その意味や価値を地域に住む人々が他の誰でもない自分たちのものとして認識することが何よりも重要である。

では、その魅力はどのようにして旅行者に伝えればいいのか。国際的な観光地「京都」に隣接するこの地域は、巨大観光都市の陰に隠れがちであり、それぞれの地域が個別に市場を開拓することは難しい。そこで、いわゆる観光圏として地域が連携し、面としての展開を図ることが重要になるが、そのキーワードのひとつが「川」ではないだろうか。

これまで亀岡 FS では保津川の筏を軸として様々な研究を進めてきた。その中で見えてきたことは、この地域は川を軸として人や資源が深くつながっていたということである。

昨年 12 月 16 日、私たちは初めての試みとして「保津川下りヒストリカルツアー」を行った。今も残る水運の遺構を辿り、船頭さんたちの舞台裏を垣間見る、そのことを通じて保津峡の美しくも厳しい自然の中で 1,000 年以上も続いてきた保津川水運の歴史と技術を体感していただくツアーである。

今回は、その模様をまじえながら、川とまちづくりについて考えてみたい。



写真： 京都府南丹市美山町。茅葺き民家が多数残る北集落は、地域資源を活かした観光振興策として、広く注目されている。(2008年11月)

脚注

[1] 着地型観光のような新しい旅行形態をニューツーリズムという。産業観光や、エコツーリズム、グリーンツーリズムなどのように、地域の立場から、それぞれの特性を活かすことを通じて地域活性化を実現することをめざして国土交通省が中心となって、ニューツーリズムの創出支援などが行われている。

守山フィールドステーション

中心市街地でソバ栽培2 —都市農園の試み— 守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

なぜ、守山中心市街地でソバ栽培なのか？という理由について、先月号でご紹介しました。今回は、2009 年に行った中心市街地でのソバ栽培の過程について述べてみたいと思います。

3つの畑

今回ソバ栽培をさせていただいた畑は、守山中心市街地の三ヵ所です。まず一つ目が、中山道沿いの町家の裏の畑です（写真 1）。庭木の剪定で出た小枝が積み、草生した状態でした。二つ目は商店街沿いの旧商店の裏の畑です。高齢者の一人暮らしのため、畑は一部しか使われず、大部分は草抑えのシートで覆われている状況でした。三つ目が同商店街の入り口に面した庭のようなスペースです。普段から、管理されている方が花を植えたり草を引いたり世話をしておられ、今回のソバ栽培にお借りすることも快諾していただきました。



写真 1

畑づくり

草生していたり、長い間シートで覆われている土地を耕さなくてはなりません。これには地元の方々にご協力いただきました（写真 2）。枯れた木を起こし、草を引き、土を耕して畝を作り、ようやく畑になります。かつては畑だっただけに耕した後の土はやわらかく、黒く、とても良い状態に戻りました（写真 3）。



写真 2



写真 3

種まき

秋そばの種は盆前後に蒔くということで、8月14日と22日に種まきを行いました。種は「信濃1号」。

近所のお子さんや、ソバ栽培に興味を持ってくださった多くの方に参加いただきました（写真 4）。

発芽！

種まきから3日～5日後、赤い茎のカイワレ大根のような芽が出ました（写真 5）。少し成長させ、葉が4枚～5枚ほどに増えた頃に間引いてみました。間引いた芽はサラダにしました。クセがなく、生食向きでした。



写真 4



写真 5

開花！！

種まきから2週間ほどで開花しました（写真 6）。白い小さな花がいくつか集まって咲きます。花にはハチやチョウなどが集まっており、これで受粉が進むようです（写真 7）。



写真 6

世話

ソバはやせ地でも荒地でも育つと言われますが、今年の夏は雨が降らず、さすがに3日に一度は水をやりました。



写真 7

また、花が咲く頃には背も高くなっており、台風などで風が強いと根元から倒れてしまいました。ビニル紐などで株を立たせました。



写真 8

結実！！！！

10月、種まきから約55日で結実が見られました。花がしおれると同時に、白い三角錐の形をした実が膨らみ始めます。それが熟すと黄緑色から黒く変色します。（写真 8）



写真 9

刈り取り

株についた実の半分くらいが黒くなったら、刈り取り、倒立で乾燥させながら追熟させます（写真 9）。刈り取るよりも、根から引く方が早く、引き抜いて収穫しました。（つづく）

朽木フィールドステーション

山の生産力、人こそ生存基盤 (1)

滋賀県立大学 黒田末寿

1. 山の生産力：炭量の見積もり

私たち朽木 FS が活動のベースの一つにしている高島市の椋川地区は、かつて椋川村と自在坊村の二村に別れていた。自在坊は国道 367 号線（小浜線）から西に椋川に入ったあと南に折れた奥の地域で、現在人は住んでいないが、自在坊生まれの澤田純三さんが作業用に家を残し、80 歳過ぎの今も山林の手入れに通っている。澤田さんは、お父さん（卯三郎氏）の日誌や山林の覚え書きを大事に保管され、内容の整理とまとめを続けておられる。覚え書きは、昭和 7 年当時の土地台帳に土地形態や沿革とその後の変遷などを書き入れたもので、ほとんどの雑木林一筆ごとに木炭の生産量を見積もり、また、柴肥・草肥をとったホトラ山の生産量も記入してある貴重な記録である。

実際のところは、山林の登記面積は実面積より過少になっているから、地図と地番を対応させて修正しなければならないが、25 年周期で楢・雑木林で木炭をつくるとどのくらいの生産量になるかを知るには得難い資料である。数値を拾い出してみると、集落に近い続き山で「総じて日當山にて樹の成長程度普通なり」という斜面でも、5 反歩 300 俵、1 反 5 畝歩 500 俵、1 反 5 畝歩 500 俵、1 反 5 畝歩 300 俵と、炭量見積もりのばらつきが大きい。炭の 1 俵は 4 貫（約 15kg）である。他の筆の見積もりも合わせると、1 反でおおむね 200-300 俵取れていたことになる。澤田家では、若夫婦で年に 500-750 俵を出荷し、これは自在坊を含む椋川全体の平均ぐらい

で、2 反か 2 反少々を使ったことになる。農繁期以外では多くの家で 2 箇所の竈を使って焼いていた。1 戸あたり額面で 7 町以上山林をもっていたから、25-30 年周期で炭焼きが可能で、十分持続的な施業になっていた。炭の値段からすると当時の農民の平均収入をかなり上回る収入を得ていたといえる。

覚え書きには炭竈を築くときの重要な情報も書いてある。ある地番では、「地味樹種 雑木に富む、女石質の赤土にして木の成長普通なり。竈の良否この山にある竈の土は、火に適せず、何度打ちても耐えず。…」よって竈をもし作るなら前の山の斜面からもってこないといけないとある。女石質は、風化して軟らかいということであろうか。また、家の裏山の 1 反 6 畝歩について、「麓の方に真竹を生じ大いに用に供す。中腹には栗の木多く実を拾うを楽しむ。源におよぶにしたがい楢および雑木を生じ総じて笹多くて困難」と真竹や栗の利用を述べ、炭量は 250 俵くらいと推定している。卯三郎氏の山林利用の計画性と余裕が眼に浮かぶ文である。

炭は 1kg あたり 30MJ の熱を出す。滋賀県辺りの標準一戸建て家庭だと年に 90,000MJ のエネルギーを消費する（NEDO,2008）から、200 俵の炭に相当する。給湯エネルギーは 18,000MJ で 40 俵相当だから、1 反で 5-7 家族の給湯ができることになる。（つづく）



写真 1: 高島市椋川の風景(初秋)



写真 2: 炭竈内



写真 3: 炭竈焚き口

■第19回 定例研究会

1. 日時：平成22年1月29日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者1：Khin Oo 氏（Yezin Agricultural University）
発表内容：Impact of the cyclone Nargis on livelihoods and

food security in the selected area of Bogalay, Myanmar.
発表者2：Lay Lay Khaing 氏（Pwint Phyu State Agricultural Institute）
発表内容：Existing Cropping Patterns in Central Myanmar: Case study
in Le Pyin Thar Village, Yemethin District, Myanmar.

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

耕地景観の落ち着きとは

—Khin Oo さんのコメントから考える—

東南アジア研究所 安藤和雄

「守山の広々とした耕地の景観は、オーストラリアやドイツに似て美しい」とは Khin Oo さん（ミャンマーYezin 農業大学教授）のコメントです。Khin さん、Lay Lay Khaing さん（ミャンマーPwint Phyu 国立農業研究所助講師）とともに、守山市の他にも京都府南丹市美山町、山口県周防大島町を1月末から2月初めに訪問しました。守山の前に美山のかやぶきの里と杉が多く植えられている谷筋の水田地帯を見学していたので、守山の広々とした用水施設のととのった耕地景観に、Khin さんがかつて留学したり研究で滞在したオーストラリアやドイツの農村景観を思いおこしたのでしょうか。広々とした耕地の景観ならばミャンマーのイラワジデルタにもあります。しかし、Khin さんは、イラワジデルタではなく、オーストラリアやドイツの耕地の風景を連想したのです。また、かやぶきの里よりも守山の耕地景観が気になったようです。このことを私なりに考えてみました。圃場整備が行われて景観が一変したにもかかわらず、守山の耕地景観は、見る者の心を捉えます。私は景観の美しさは、景観の落ち着きであると考えています。景観を構成しているさまざまな部分が馴染んだ構成をもっている時、景観を美しいと人は表現するのだらうと考えています。私は守山には10年以上前から時々来ているので、少なくともそれ以上前には圃場整備は終了しているはずですが、一方、2～3年前から一枚の水田が50aから1haの大区画水田に整備され、畦が作り替えられ、農道や水路が新規に出現している亀岡盆地の新しい水田景観は、未だどこか落ち着きがありません。以前の景観を知っているからだ指摘されるかもしれませんが、そうではありません。恐らく、適用されている農業技術と面積の親和性など、細かく分析していけば、理由をあげることは可能でし

うが、大区画水田に立っていてもどこか居心地が悪いのです。亀岡の大区画水田景観が落ち着くまでには、まだ熟成期間が必要なのでしょうか。そして、Khin さんが守山の耕地景観を美しいと表現したもうひとつの要素は、守山の広々とした耕地では、放棄され雑草が生い茂る耕地や、水田や畑から杉などの林地への転化が皆無なことです。私は、ドイツやオーストラリアの耕地景観を自分の目で見たことがないので、Khin さんの目を通じて想像するしかありませんが、きっと、放棄地や林地などの転化はなく、耕地は耕地として人の労働が日々加えられ、生業として農業がまだまだ成立しているのでしょうか。守山の耕地景観が Khin さんの心を捉えたのは、農業がしっかりと地域で居場所を確保し、集落営農、法人営農、家族経営と農業経営は多岐に分化しつつありますが、守山では後継者により営農が継続していることが大きいのではないのでしょうか。

耕地景観の落ち着きや美しさは、つきつめていくと、生存基盤としての機能が持続されているかどうか、という点に行きつくことに気がつきます。棚田や伝統農村家屋の保全の必要性がさげばれて久しいですが、美しさの源が生産と暮らしの基盤をつくってきたからであるという原点を今一度肝に命じておく必要があると Khin さんのコメントに教えられました。

ミャンマーのお二人のために市長表敬の時間をとっていただき、市長との意見交換ができたことをお二人は大変感謝していました。特に、守山は仏教信仰が強いところでもあり、地域おこしにとっては、単なる経済の問題ではなく、文化や心の問題が重要だという市長の指摘は、篤信の多いミャンマーの方には非常に励みになったことでしょう。この場をおかりし、守山市役所の市長、職員の方々、美山町かやぶきの里民俗文化資料館や、野洲川の近くの果樹園でお話をうかがうことができた村の方に、重ねて感謝いたします。ご協力ありがとうございました。